

## 断乳をめぐる母親の内的経験 ——断乳時期の決定に関与した要因に着目して

坂上裕子 日立家庭教育研究所  
Hiroko Sakagami Hitachi Family Education Research Center

### 要約

断乳の時期に関しては栄養学、歯学、心理学など様々な見地からの議論がなされてきたが、当事者である母親の視点はこれまで軽視されてきた。そこで本研究では、2歳児の母親23名に半構造化面接を行い、断乳時期の決定に関与した要因に着目しながら、断乳を巡る母親の内的経験を把握することを試みた。母親の言及内容をカテゴリー化した結果、断乳の決定に関与した要因は、それがどの立場から哺乳・断乳を促した発言であるかによって、母親の個人的視点（授乳に伴う乳房の痛みや物理的制約）、子どもの健康管理者としての視点（栄養管理や歯の健康管理）、社会的視点（身近な他者の意見など）、子どもの視点（哺乳が子どもにとって持つ意味や乳房を求めることへの共感など）の4つの視点に関連した考えに整理できた。断乳の決定に関与した要因は、断乳を試みた時期によって異なっていた。早い時期（18ヵ月齢以前）に断乳が完了した母子では、主に栄養管理（離乳食の進行状況など）という観点から断乳が行われており、これらの母親は断乳に伴う心理的葛藤を訴えることはほとんどなかった。一方、遅い時期（19ヵ月齢以降）に断乳を試みた母子や、哺乳を継続していた母子では、多くの母親が乳房を求める子どもの視点と、他の視点間の葛藤を訴えていた。哺乳を継続していた母親は、子どもとの間で断乳に対する共通理解と合意を形成することによって、断乳を巡る葛藤に折り合いをつけているように考えられた。

**キーワード** 断乳, 哺乳, 葛藤, 母子

### Title

**Internal Experiences of Mothers Related to Weaning: Focusing on Factors on Weaning Decisions**

### Abstract

Although many discussions have been held on the timing of weaning from various perspectives such as dietetics, dentistry, and psychology, the views of mothers have been neglected. To explore the internal experiences of mothers related to weaning, I interviewed 23 Japanese mothers. Ideas that influenced weaning decisions were classified into four categories, based on the standpoint from which maternal references were made: 1) maternal personal standpoint (physical pain with lactation etc.), 2) children's health management standpoint (nutritional management, etc.), 3) social convention standpoint (critical views of neighbors toward lactation, etc.), and 4) children's standpoint (psychological meaning of sucking for children, etc.). Mothers who weaned early (when children were 18 months old or younger) referred to nutritional reasons and seldom reported weaning conflicts. In contrast, most of the mothers who attempted weaning later (when children were 19 months old or older), or who continued lactation, reported conflicts between the children's standpoint and other standpoints. The mothers who continued lactation seemed to cope with the conflicts by reaching mutual understandings about weaning with their children.

### Key words

weaning, lactation, conflict, mother-toddler dyad

## 問題と目的

歩行開始期は、子どもの歩行の開始を契機として母子間の身体的、心理的分離が急速に進む、発達上重要な時期にあたる。母子の分離は探索範囲の拡大や父親との関係の深まり、他児への興味・関心など、様々な側面に表れる (DeHart, Sroufe, & Cooper, 2000) が、本研究ではその重要な形態の一つとして、いわゆる乳離れ (断乳・卒乳) の問題を取り上げる。ただし、離乳や断乳といった言葉は多義的に用いられている術語であるため、はじめに術語を整理しておく。

乳離れは、ヒトに限らず哺乳類全般に共通してみられる現象である。生物学的には、離乳という語を用いるのが一般的であろう。根ヶ山 (1997) によれば、哺乳類の母子関係における離乳とは、子どもの食過程を、子どもが未熟なうちは親が全面的、または部分的に代行し、徐々にその代行業を削減していく過程にあたる。母親にとっては、哺乳は子どもに対する資源の投資にあたり、離乳は自身にとって養育の負担の軽減となる。すなわち離乳は、子どもの乳首への接触要求を拒絶し、子どもが移動、採食、他個体との社会的交渉を促進していくようにし向ける過程にあたるという。一方で、ヒトの離乳に特有の性質もある。ヒトの場合、地域の栄養事情や衛生状態、社会・文化における育児観、ジェンダー観、女性の就労状況など様々な要因が離乳の完了時期や離乳の様式に影響しており (McDade & Worthman, 1998)、離乳という現象に社会・文化的な意味や価値観が色濃く付加されている。

ところで、日本では一般的に、離乳という語は栄養資源の移行や食行動の移行を指す際に用いられ、いわゆる乳離れ、すなわち乳房からの哺乳をやめたか否かを限定的に指す場合に用いられることは少ない。例えば、厚生省による「改訂・離乳の基本」(厚生省, 1996) では、離乳は「母乳または育児用ミルク等の乳汁栄養から幼児食に移行する過程」と定義され、また、形のある食物をかみつぶすことができるようになり、栄養素の大部分が母乳または育児用ミルク以外の食物からとれるようになった状態を持って、「離乳の完了」と定義されている。一方、心理学の文献では、乳

房からの哺乳をやめたか否かを指す際に離乳という語が用いられている場合もあり (例えば根ヶ山, 1997)、必ずしも統一はなされていない。

乳房からの哺乳の中止を指す「断乳」という語もまた、多義的に用いられている語である。例を挙げると、真に栄養学的に母乳が必要であるのは 6~9 ヶ月頃である、という理由から、「栄養学的断乳」と「心理学的断乳」(不安を解消する心の栄養品として母乳を位置づけ、それが不要になること) とを区別する人もある (南部, 1989)。また、乳房からの哺乳の中止に至るプロセスとして、親の意思が強く働き、親主導で行われる場合を「断乳」、また、子どもの意思を尊重し、子ども主導で行われる場合を「卒乳」と呼んで、両者を区別する場合もある。翻って欧米では、日本語の「離乳」や「断乳」に相当する “weaning” という語は、栄養資源や食行動の移行という意味でも、乳房からの哺乳の中止という意味でも用いられており、さらに、人工栄養で瓶哺乳からコップ飲みへの移行を指す際にも用いられる (二木, 1984) など、より包括的な意味で用いられている。

以上を整理すると、術語使用に関する見解の相違は、離乳に関わる諸現象を、主に栄養学的観点から栄養資源や食行動の移行の問題として捉えるのか、あるいはそこに関わる心理的過程をも視野に含めた、母子の身体的・心理的分離の問題として捉えるのかによる、と言えるかもしれない。本論文では、離乳に関わる諸現象を、単なる栄養資源の移行の問題としてではなく、社会・文化的意味が付与された、心理的過程を含んだ現象として捉えることとしたい。また、母子の身体的・心理的分離という観点から言えば、母親の乳房やそれに代わる哺乳瓶の乳首からの哺乳を中止することに意味があると本論文では考える。そこで、本論文では、母親の乳房からの哺乳の中止と哺乳瓶の使用の中止の両方を指して、断乳<sup>(1)</sup>という語を用いることにする。また、母親の乳房や哺乳瓶乳首からの哺乳を完全に中止できた状態を指して、断乳の完了という語を用いることとする。

離乳について様々な観点からの捉え方があることに付随して、断乳の時期や方法についても、様々な考え方が存在する。例えばこの十数年の間、日本では、歯科衛生上の問題、すなわち哺乳期間が長引くことに伴

う虫歯の増加や歯列への影響、咀嚼機能の成熟の阻害といった理由から、遅くとも1歳半頃までに母親の乳房や哺乳瓶からの哺乳をやめるのが望ましい、という指導が行われてきた(大竹, 1984; 田村・山田, 1998)。しかしながら最近では、虫歯の発生には複数の要因が関連しており、母乳や哺乳瓶の使用がその直接的原因ではないことも指摘されている(南部・太田・服部・三浦, 1996; 石川・吉橋・福田・伊藤・伊藤・成清・西谷・加藤, 2002)。また、医学的にみれば、栄養面で母乳が必要なのは生後5, 6ヵ月頃まで(今村, 1987; 南部, 1989)とされている。それ以降いつまで母乳を続けるのが望ましいのかについては、小児科医の間でも意見が分かれており、個々の母子に任せるべきだとする人(今村, 1987; 南部・太田・服部・三浦, 1996)もいれば、母乳を長く続けることの弊害を念頭におきながら、経験的に母乳を止めやすい時期(二木, 1984は生後10ヵ月頃, 平山, 1992は生後8~10ヵ月頃と述べている)に断乳することを薦める人もいる。

母親主導による断乳という形と、子ども主導による卒乳という形のいずれが望ましいのか、という議論も、異なる観点のもとに生じてきたものと言える。桶谷式(桶谷, 2002)として知られる断乳方法では、主に乳質の低下によって母体や子どもに影響が及んでくることと、子どもの消化器官が成熟してくることを理由に、子どもの歩行開始後に断乳することを薦めている。一方、無理矢理断乳するのではなく、母子双方が必要としなくなるまで哺乳を続けるのが望ましいとする卒乳の考えは、哺乳の際の身体接触が、母子の愛着形成において持つ意味や、子どもに与える心理的安心感を重くみた考え方とも言える(例えば南部, 1989)。さらに、関連する最近のトピックとして、平成14年度の母子健康手帳の改訂を挙げることができる。改訂前の母子健康手帳では、1歳6ヵ月健康診査の際に、断乳の完了を確認する欄があったが、今回の改訂では「断乳」という表現が削除され、母乳を飲んでいるか否かを確認する欄に置き換えられた。この改訂は、母子のスキンシップなどの観点から1歳以降も無理に母乳をやめさせる必要はないとする考え方が主流になってきていること、また、「改訂・離乳の基本」(厚生省, 1996)でも母乳は自然とやめるようになると明示して

いる、という2つの理由から行われたという(厚生労働省, 2000)。今回の改訂は、日本における離乳の捉え方が、哺乳や断乳が母子にとって持つ心理的な意味をより重視する方向へと変わってきたこと、また、個々の母子の判断をより重んじる方向へと変わってきたことを示唆するものと言える。

結局のところ、いつ頃を好ましい断乳時期と考えるかについては、栄養学的見地、歯科衛生的見地、心理学的見地など、様々な立場に基づいた情報が混在しており、混乱を極めているのが現状である。無論、母子双方の心身の健康にとって、いつ頃、どのような形で断乳するのが望ましいのかを、様々な専門の見地から助言することは重要である。しかし、実際の現場では、専門家の相容れない見解が母親に混乱を生じさせていたり(田中・林, 2002)、様々な立場の専門家の考えが強調されるあまり、当事者である母子の感情や考えがおろそかにされたり、また、極端な場合には、断乳していないことに対して母親が専門家や周囲の人から非難を受ける、ということも生じたりしている(例えば毛利・山田, 1997)。

断乳の時期や方法を考えるにあたって、当事者である母子の心理的側面が相対的に軽視されていることは、断乳に関する心理学的研究の数の少なさからも窺うことができる。断乳に関する研究の多くは、医学や栄養学、歯学的見地に基づくものであり、心理学的見地からの研究は、中尾・宮原(2001)と、根ヶ山(1997)の論文で部分的に扱われていることを除くと、ほとんど見あたらないと言える。しかしながら、断乳に関する心理学的研究のニーズは、潜在的には高いように思われる。中尾・宮原(2001)の研究では、母乳哺育中の10~12ヵ月齢児の母親34人のうち6割以上が、生後18ヵ月までを目標に、「そろそろ(乳を)離そうと思っている」「時期をみて(乳を)離す」と答えた、という結果が報告されている。中尾らは自らの調査結果を受け、この時期の母親は、「いつまでお乳を飲むのだろうか」と先の見えない不安と拘束感に悩まされる不安定な時期にあり、母親に対する専門家の介入が必要ではないか、と述べている。その一方で、様々な立場の専門家の助言が、かえって母親に混乱を生じさせている現状に鑑みると、子どもの発達援助や育児支援に関わる専門家である我々心理学者は、断乳

の時期や方法について心理学的観点から意見を述べるだけでは不十分であろう。我々は同時に、哺乳や断乳に関する様々な情報が、個々の母親にどう意識され、それが断乳に関する母親の決定にどう関わっているのかを、当事者である母親の内的視点から捉える必要があるのではないだろうか。そのような母親の声に耳を傾けることによって、より個々の母子のニーズに沿った発達援助や育児支援をしていくことが可能になるものと思われる。

そこで本論文では、一般には断乳を完了していることが想定される、2歳代の子どもを持つ母親にインタビューを行い、特に断乳時期の決定に関与した要因に着目しながら、断乳に際しての母親の内的経験を把握することを試みた。それと同時に、断乳時期と、断乳をめぐる母親の内的経験との関連について、仮説を生成することを試みた。具体的には、①母親はいかなる理由から、いつ頃に断乳を試みる（あるいは断乳をせずに哺乳を続ける）ことを決めたのだろうか、②断乳の実行（あるいは、断乳の継続）の決定は、母親にはどのようなこととして経験されていたのだろうか、③断乳時期を決める上で母親が考慮した要因や、断乳に際しての母親の経験は、断乳を試みた際の子どもの年齢によって異なるのだろうか。中尾・宮原（2001）が述べるように、断乳時期が遅い人ほど、子どもがいつまで哺乳を続けるのかという不安と、拘束感に悩まされるのではないかと考えられる。ゆえに、断乳に際しての経験は、断乳の時期が遅くなるほど、心理的な葛藤を伴うものになるのではないかとと思われる。

## 方 法

本研究は探索的な性質を持つため、手法として質的方法を選んだ。質的方法は、よく知られていない事象について人がそれをどう理解し経験しているのか、つまり人の内面からみた経験の意味や基本的構造の把握を目的とする（Creswell, 1994）。また、現象の持つ複雑な中身の記述に適し、理論や仮説の生成に有効性を発揮する（Strauss & Corbin, 1998）とされる。本研究では質的研究のうち、グラウンデッド・セオリーの手

法を援用して、データの収集と分析を行った。

## 協力者

首都圏在住の生後24～36ヵ月児（男11、女14）を持つ母親23名（27～36歳）。子どもの出生順位はひとりっこ（16名）、2人きょうだい第2子（6名）、3人きょうだい第3子（3名）であった。また、23名中3名は昼間の養育を保育園で受けていた。協力者の家庭は1家族を除き核家族であった。協力者は地域の児童館や母親サークル、筆者の知人への募集広告を介して募った。なお、分析ではこのうち、哺乳・断乳についての言及があった23名分のデータを用いた。

## データ収集の手続き

断乳に関する面接は、1歳代後半～2歳代にかけて生じる主な発達のイベント（反抗や自己主張の本格化、母親からの身体分離など）を母親がどう受け止め、対処しているかを探るべく計画された面接の一環として行った。面接は全て、筆者自身が行った。面接の実施に際しては、母子の日常のやりとりの様子を、母親が主観的に感じたり考えたりしていることに着目しながら、母親と共に辿ることを基本的姿勢とした。同時に、母親に自分の育児が評価されている感じを抱かせることのないよう、安心して本音を話せる場を作ることが必要だと考え、面接時には筆者が母親にとって気軽な話し相手となるような雰囲気を作ることを心がけた。哺乳や断乳について尋ねる際には特に、人工乳で育てた人や、断乳時期が早かった人、あるいは面接時点でまだ断乳していなかった人に、不用意に罪責感を抱かせることがないように留意した。なお、断乳や離乳という語は多義的であるため、協力者が自発的にそのような表現を用いる場合を除き、筆者の側からは、断乳や離乳という言葉を用いることは控えた。代わりに、「おっぱいを飲むこと」「哺乳瓶を使うこと」「おっぱいをやめること」などの表現を用いるようにした。

面接は可能な限り、協力者宅で子ども同席で行った。自宅での面接を希望しなかった4名は、児童館や飲食店など協力者が日常利用する場所で子ども同席で面接を行い、子どもが保育園に通っていた3名は、母親の

みと面接を行った。

面接は、基本的には母親が話す内容の流れに沿って柔軟に進めた。哺乳・断乳に関連する発言があった際には、出来るだけ誘導尋問にならないよう留意しながら、より詳細な情報を提供してもらうためのプロンプトを適宜挿入した。ただし、哺乳や断乳に関連する発言が面接開始後しばらくたってもみられなかった場合には、筆者の側から、不自然にならないタイミングを見計らって質問を切り出した。具体的には、哺乳形態（母乳であったか、人工乳であったか）を尋ねた上で、いつ頃、どのような理由で、どのようなやり方で断乳を進めたのかを尋ねた。面接は、協力者の許可を得て録音した。

### 分析手続き

分析には、Glaser & Strauss (1967), Strauss & Corbin (1998) によるグラウンデッド・セオリー・アプローチ (以下 GT と略記) を援用した。GT は、特定の文脈における具体的経験に根差した理論を帰納的に構築することを目的とした、質的方法の一つである。その分析では、データ間の比較を通して、対象者の経験についての意味や概念をデータから立ち起こし、概念間の関連を探索することによって仮説を生成していく。GT ではカテゴリー化の作業を行うが、ここで言うカテゴリー化とは、データから意味や概念を同定し、それらを統合する一連のプロセスを指しており、既存の理論や先行研究などから予め導き出されたカテゴリーに基づいてその内容を分類する、内容分析とは全く異なる。

以下に、筆者がとった分析手順を記す。1) **逐語記録の作成**：全ての面接について筆者自身が逐語記録を作成した。2) **全体的な内容の把握と、哺乳・断乳についての言及箇所**の同定：内容理解のため、全てのトランスクリプトを数回読み返した。次に、トランスクリプトの中から、哺乳や断乳に関する言及箇所を特定した。3) **コーディング作業**：特定されたトランスクリプトの各部に、その内容を端的に表すラベルをつけた。その上で、ラベルを類似性と相違性に従って分類し、カテゴリー（特徴や性質を共有するラベルをグループ化し、新たに抽象的なラベルをつけたもの）を生

成した。その後、生成したカテゴリー同士を比較し、カテゴリー間の類似性と相違性の同定を繰り返すことを通して、新たなカテゴリーの生成や既に同定したカテゴリーの修正を行った。これらの一連の作業の結果、断乳の決定に関わった要因、すなわち、母親が断乳（あるいは哺乳の継続）を決めた際に考慮した要因に関するカテゴリーと、断乳・哺乳継続の条件に関するカテゴリーを生成した（表 1）。実際には、母親が断乳や哺乳の継続を決めた際に関係したであろう要因や条件は、母親が言及した以外にも多数あったものと考えられる。しかし、母親から自発的に語られたものは、母親にとって特に意識化されていたものであると想定されるので、それらを、母親が断乳や哺乳の継続を決めた際に考慮した要因・条件としてみなすことにした。

4) **マトリクスの作成**：①哺乳方法の別、②断乳を試みた月年齢と断乳完了の月年齢、③断乳に対する（子どもからの）抵抗の有無、④面接時点における断乳の完了状態、⑤断乳の決定に関与した要因に関する各カテゴリーへの言及の有無、⑥断乳・哺乳継続の条件に関する各カテゴリーへの言及の有無、⑦断乳の決定・進行の際しての、視点の葛藤の有無、を個人別にまとめたマトリクス（表 2、詳細は後述）を作成した。

## 結果と考察

### (1) 抽出したカテゴリーの説明

#### 断乳時期の決定に関与した要因

はじめに、プロトコルから生成した、断乳の決定に関与したと考えられる要因をまとめたカテゴリーのリストを示す。表 1 に、少なくとも 2 名以上の母親から挙げられた要因のカテゴリー名と、その内容に関する説明を示した。これらの要因はさらに、それが誰の立場から哺乳・断乳を捉えたものであるのか、あるいはいかなる観点から哺乳・断乳を捉えたものであるのかによって、以下の 4 つの視点に整理できると考えられた。

a. **母親の個人的視点**：授乳に伴う「母親の身体的な負担・制約」、「哺乳期間の長期化に伴う、断乳困難の

予期」,「自身や家族の予定・計画」,「家族の睡眠の管理」,「母親にとっての授乳<sup>2)</sup>の利便性」,「母親自身の授乳<sup>2)</sup>の希望」をまとめて、「母親の個人的視点」とした。これらは主に、母親自身の身体的・物理的負担や、母親自身(や家族)の生活の管理という観点、あるいは母親の個人的感情から、断乳を捉えたものであると考えられたので、母親の個人的視点と命名した。主なカテゴリーについて説明を加えておく。「母親の身体的な負担・制約」には、乳房の吸てつに伴う痛みや、授乳行為に伴う身体の拘束、時間的制約、授乳のための衣服の制約など、授乳による様々な負担や制約への言及が含まれた。また、「自身や家族の予定・計画」を、断乳の際に考慮された要因として抽出したが、これは、母親自身の仕事やきょうだいの予定(幼稚園の通園など)によって生じる物理的・時間的制約が、授乳に伴う負担や制約と干渉するため、哺乳を継続するか否かの判断に関わってくるためであると考えられた。「家族の睡眠の管理」や「母親にとっての授乳の利便性」という2つのカテゴリーには、子どもの泣きの問題が関係していた。すなわち、前者には哺乳が原因で生じる夜泣きへの対処についての言及、後者には子どもの泣きを宥める手段としての授乳の利便性についての言及が含まれた。

**b. 健康の管理者としての視点:**「歯の健康管理」や「栄養管理」は、子どもの健康管理という観点からの言及にあたると考えられた。そこで、これらのカテゴリーをまとめて、「健康管理者としての視点」とした。「栄養管理」には、母乳からミルクへの切り替えがうまくいったかどうか、あるいは離乳食をよく食べたかどうか、といった内容の言及が含まれた。桶谷式に従って断乳したと述べた人が3名いたが、これも、「栄養管理」とみなすことにした。これは、桶谷式では、子どもに良質の乳汁を与えることが重要であり、ゆえに、母親の乳質が低下してくる歩行開始後の時期が断乳に適した時期である、と考えているからである。また、「歯の健康管理」には、虫歯や歯列への影響についての言及が含まれたが、これらは歯科医や保健婦の指導や本からの知識を受けて述べられていた場合がほとんどであった。

**c. 社会的視点:**「幼稚園の存在」「身近な他者の意見・評価」はいずれも、日本の社会に暗黙に存在して

いる、断乳の標準時期を反映したものであると考えられた。ゆえにこれら2つを、「社会的視点」としてまとめることにした。まず、幼稚園という社会的枠組みは、「まだ幼稚園に行くわけではないから(おっぱいを飲んでいてもいい)」「幼稚園に入ってまで(哺乳瓶)を飲んでるのかな、って心配だった」といった発言にみられたように、一部の母親にとっては断乳完了の時期の一つの目安として意識されていることが窺えた。また、「身近な他者の意見・評価」というカテゴリーに分類された発言には、「(おっぱいを飲んでいることに対して)周りからはもう2歳なんだから(おっぱいをやめるべき)、って言われた」「(哺乳瓶を使っていることは)人にはとても言えない」「周りの人の中で(おっぱいをまだ飲んでいるのは)うちだけ」といったものがあつた。これらの発言は、母子の身近にいる人たちが断乳の標準時期なるものを暗黙に有していることや、母親が断乳の時期に関して同年代の他の親子を参照枠としていること、そしてそれらが母親に、断乳を意識させる要因となっていることを示唆する。

**d. 子どもの視点:**母親からは、母親の乳房や哺乳瓶を吸うことの、子どもにとっての心理的な意味(子どもにとっては安心感を得られる行為であることなど)、子どもから乳房や哺乳瓶を取り上げることに對する憐憫、断乳が子どもの心理的側面に与える影響に対する心配について述べられることがあつた。これらを、「子どもへの共感・影響の配慮」と名付けた。これらの発言は、子どもの立場からみた哺乳や断乳の意味に言及した発言にあたると考えられたため、「子どもの視点」と命名した。

#### 断乳・哺乳継続の条件

断乳の条件は、既に断乳を完了した母親(あるいは面接時点で断乳を試みていた最中にあつた母親)が、断乳を試みた際に考慮した条件を指しており、これにあたるカテゴリーとして、「哺乳の代替行為としての、母親の身体・代替物への接触の容認」を生成した。また、哺乳継続の条件は、面接時点で断乳を完了していなかった母親が、哺乳を続けていること理由や説明として挙げた内容を整理・分類したものである。これにあたるカテゴリーとして、「断乳に対する子ども自

表1 断乳の決定に関与した要因と、断乳・哺乳継続の条件

断乳時期の決定に関与した要因		カテゴリーの内容説明
母親の個人的視点	母親の身体的負担・制約	授乳することによって、母親の身体にかかる負担（乳首を噛まれて痛い、子どもが母乳を求めて夜泣きをするので寝られない、など）。母親に課せられる、衣服・食べ物・時間の上での制約
	哺乳期間の長期化に伴う、断乳困難の予期	子どもの年齢が高くなると、母乳や哺乳瓶をやめるのが困難になる、という他者からの情報。
	自身や家族の予定・計画	自身の仕事や次子出産の予定。家族の事情による、断乳の必要性。
	家族の睡眠の管理	子どもが母乳を求めて夜泣きをするため、他の家族が眠れない（注：夜泣きを断つために断乳したケースもあれば、子どもを泣きやませるための手段として哺乳を続けたケースもある）。
	母親にとっての授乳の利便性	授乳することの、母親にとっての利便性（「あげていた方が（泣きやませるには）楽」、「あげれば泣きやむので便利」など）。
	母親自身の授乳の希望	子どもにまだ母乳をあげていたい、という母親自身の希望。
健康管理者としての視点	歯の健康管理	乳房の吸てつや哺乳瓶の使用による、齲歯や歯列への悪影響の心配（注：歯科医や保健婦による、悪影響についての指摘を含む）。
	栄養管理	牛乳への切り替えの成否や、離乳食の進行状況、子どもの食事量への言及（注：子どもの食が細い場合、食べる量を増やす目的で断乳を試みたケースもあれば、食事量の少なさを補うため、哺乳を続けたケースもある）。
社会的視点	幼稚園の存在	断乳完了時期の目安として、幼稚園への入園時期を意識した発言
	身近な他者の意見・評価	（専門家以外の）身近な他者（兄の祖母、母親の友人など）から向けられた、哺乳していることに対する否定的意見（「もう断乳した方がいいと言われた」「甘やかしている、と言われた」など）。哺乳していることについて、他者の評価を意識した発言（「おっぱいを飲んでいることは）人には内緒」「3歳にもなる子が外でおっぱいを飲んでいると恥ずかしい」など）。
子どもの視点	子どもへの共感・影響の配慮	乳房や哺乳瓶を吸うことの、子どもにとっての意味への言及（「おっぱいが）この子にとっては大事、必要なんだ、と思う」など）。断乳を試みるのが子どもに与えるであろう、悪影響についての言及（「無理矢理（おっぱいを）外して、後で影響が残っても困る」など）。断乳することに対する子どもへの憐憫（「子どもから哺乳瓶とりあげるのはいそがしいと思った」など）。
断乳・哺乳継続の条件		カテゴリーの内容説明
断乳の条件	哺乳の代替行為としての母親の身体や代替物への接触の容認	乳房を吸てつすることの代わりに、母親の身体（乳房や他の身体部位）や代替物（タオルなど）に子どもが接触することを容認する。
哺乳継続の条件	断乳に対する子ども自身の理解	断乳の必要性についての、子ども自身の理解についての言及（（子ども自身が）「分かってやっている」、「そのうち恥ずかしいことだと分かってくる」、など）。
	哺乳機会の制限・減少	哺乳の際に、子どもに制限を課す（例えば、外ではおっぱいをあげない、おっぱいを飲むのではなく、触るだけにしよう促す）。子どもが乳房を求める頻度が減少したり、状況が限定されたりしてきている。

表2 断乳をめぐる経験に関する、個人別プロフィール

断乳方法の別	協力者役称	面接時の対象児の年齢																				言及人数 (N=23)			
		A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q	R	S	T		U	V	W
①哺乳方法の別	面接時の対象児の年齢	2:4	2:5	2:1	2:3	2:5	3:0	2:4	2:6	2:4	2:4	2:8	2:5	2:6	2:6	2:2	3:0	2:5	2:8	2:8	2:4	2:8	2:6	12	
②断乳を試みた月年齢と断乳完了の月年齢 <sup>a</sup>	母親の乳房○／哺乳版△	○	○	○	△	△	○	○	○	○	○	○	○	△	△	○	△	○	○	○	○	○	○	4	
③断乳に対する抵抗	( 歳 か月)	0:9	1:0	1:0	1:0	1:0	1:0	1:1	1:1	1:2	1:3	1:4	1:6	1:6	1:6	1:0	1:6	1:3	1:8	1:8	1:6	2:0	0:11	4	
④面接時点における断乳の完了状態	抵抗なし(空欄)／抵抗有○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	4	
⑤断乳時期の決定に関する要因	完了○／未完了●	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	2	
⑥断乳時期の決定に関する要因 (○は、断乳等を進める方向への考えを、●は断乳を続ける方向への考えを、△はそのいずれでもないものを意味する)																									2
母親の個人的視点	母親の身体的負担・制約	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	4	
	哺乳期間の長期化に伴う、断乳困難の予期		○																					4	
	自身や家族の予定・計画		○																					2	
	家族の睡眠の管理		○																					4	
健康管理者としての視点	母親にとっての授乳の希望																							7	
	母親自身の授乳の希望																							13	
	歯の健康管理	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	8	
社会的視点	幼稚園の存在																							2	
	身近な他者の意見・評価		○																					8	
子どもの視点	子どもへの共感・影響の配慮																							9	
⑦断乳・哺乳継続の条件																									6
断乳の条件	哺乳の代替行為としての、母親の身体や代替物への接触の容認	○																						4/5	
	断乳に対する子ども自身の理解																							4/5	
哺乳継続の条件	哺乳機会の制限・減少																							4/5	
⑧断乳時期の決定に際しての、視点の葛藤の有無																									13
葛藤なし		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	5	
同一視点内の葛藤																								12	
視点間の葛藤																								6	
(葛藤の内容)		母親の個人的視点と健康管理者としての視点																						3	
		母親の個人的視点と子どもの視点																							7
		健康管理者としての視点と社会的視点																							0
		健康管理者としての視点と子どもの視点																							5
		社会的視点と子どもの視点																							7

<sup>a</sup> 断乳の試みを開始した月年齢と、断乳が完了した月年齢が同じである場合には、断乳を完了した月年齢の記載を省略した。

<sup>b</sup> Vさんの場合、積極的に授乳を望んでいたわけではなく、断乳する理由が思い当たらない、というやや消極的な理由で哺乳を続けていたため、●ではなく△とした。

<sup>c</sup> Iさんの場合、子どもへの影響への配慮が断乳の躊躇につながったのではなく、子どもの心理的状態がインテリゲンツを見計らって断乳を実行する、という意味での配慮であったため、●ではなく△とした。

身の理解」「哺乳機会の制限・減少」の2つを生成した。

## (2) 子どもの月年齢と断乳の決定に関与した要因の関連

次に、①哺乳方法の別（断乳当時（断乳未完了の人は、面接実施当時）の主たる哺乳形態が、母親の乳房からの哺乳であったか、哺乳瓶哺乳であったか）、②断乳を試みた月年齢と断乳完了の月年齢、③断乳に対する抵抗の有無（断乳の試みに対して、泣きや飲食の拒否、赤ちゃん返りといった抵抗を子どもが示したか否か）、④面接時点における断乳の完了状態（断乳が完了していたか、未完了（断乳の試みを継続中、あるいは断乳を積極的には試みなかった）であったか）、⑤断乳時期の決定に関与した要因（表1参照）への言及の有無、⑥断乳・哺乳継続の条件（表1参照）への言及の有無、を各協力者ごとにまとめた。これを、断乳完了時の月年齢が低かった人から順番に並べ替えたのが、表2のマトリクスである。以下では、表2のマトリクスに基づいて、断乳を試みた際の子どもの月年齢と断乳時期の決定に関与した要因との関連について、検討する。文中の（ ）内の数値は、その要因に関する言及がみられた母親の人数を意味する。

まず、断乳を試みる方向へ母親の意識を向けたと思われる要因からみていく。断乳を考えた理由としてもっと多くの母親が挙げているのは、「授乳に伴う身体的負担・制約」であった（12名）。また、「哺乳期間の長期化に伴う断乳困難の予期」（4名）、「自身や家族の将来計画」（4名）、「家族の睡眠の管理」（3名）も、断乳へと母親の意識を向けられた理由としてあげられていた。これらのカテゴリーについては、断乳完了時の子どもの月年齢との関連はみられなかった。

子どもの「健康管理者としての視点」も、概して断乳を進める方向に母親の意識を向けさせた要因であると考えられた。ただし、言及されたカテゴリーには、子どもの月年齢によって偏りが認められた。まず、相対的に低い月年齢（1歳6ヵ月よりも前）で断乳が完了した母子（Aさん母子～Kさん母子計11組）では、多くの母親（8名）が、子どもが離乳食をよく食べたことやミルクへの切り替えがうまくいっていたことな

ど、「栄養管理」という側面を考慮して断乳を試みている。これに対して、相対的に高い月年齢（1歳6ヵ月以降）で断乳が完了した母子や、面接時点において断乳が未完了だった母子（Lさん母子～Wさん母子、計12組<sup>9)</sup>では、断乳を試みようと考えた理由として「栄養管理」を挙げた母親は2名しかいなかった。断乳を試みることを考えた理由として「栄養管理」を挙げた人数の割合に両群で差があるかどうかをFisherの直接確率計算法<sup>9)</sup>によって検討したところ、 $p = .01$ （両側検定）で有意であった。一方、相対的に高い月年齢で断乳が完了した母子や、断乳が未完了であった母子では、約半数（12名中7名）の母親が、「歯の健康管理」という観点から断乳の必要性を認識していたようであった。これに対して低い月年齢で断乳が完了した母子には、歯の健康管理に言及した人はいなかった。「歯の健康管理」に言及した人数の割合に両群で差があるかどうかをFisherの直接確率計算法によって検討したところ、 $p = .005$ （両側検定）で有意であった。「歯の健康管理」への言及が1歳6ヵ月以降に断乳を完了した人にもみられたのは、1歳6ヵ月健康診査の際に、歯科医や保健婦等から歯の健康管理についての指導がなされることが関係しているのではないかと考えられる。

「社会的視点」の「身近な他者の意見・評価」も、断乳へと母親の意識を向けさせた要因であると考えられた。ただし、このカテゴリーに言及した人（計8名）のほとんど（7名）は、相対的に高い月年齢で断乳が完了した母子や、断乳が未完了だった母子の母親であった。「身近な他者の意見・評価」に言及した人数の割合に、両群（相対的に低い月年齢で断乳した母子11組と、それ以外の母子12組）で差があるかどうかをFisherの直接確率計算法によって検討したところ、 $p = .027$ （両側検定）で有意であった。この結果は、1歳6ヵ月を過ぎる頃から、母親が断乳に関して他者の意見や評価を意識するようになること、また、明示的にも暗示的にも、断乳をしていないことに対して、社会的な圧力が課されやすくなることを示唆している。

次に、哺乳を継続する方向に母親の意識を向けたと考えられる要因についてみていく。哺乳を継続する方向へ母親を方向づけた要因としては、「母親の個人的視点」の中の、「家族の睡眠の管理」（1名）、授乳の

「母親にとっての利便性」(2名)、「母親自身の授乳の希望」(4名)や、「健康管理者としての視点」の中の、「栄養管理」(3名)が挙げられていた。「栄養管理」に言及した3名は、子どもの食の細さを母乳や人工乳で補うために哺乳を続けた、と述べていた。以上の要因については、言及した人がそれほど多くなく、断乳を試みた月年齢との有意な関連は認められなかった。断乳に躊躇を覚えた理由としてもっとも多くの方が挙げているのは、「子どもへの共感・影響の配慮」(9名)であり、この要因については、断乳完了時の月年齢との関連が認められた。すなわち、相対的に高い月年齢で断乳を試みた母子や、断乳が未完了だった母子では、このカテゴリーに言及した母親が過半数(12名中7名)を占めた。これに対し、相対的に低い月年齢で断乳が完了した母子では、このカテゴリーに言及した人はほとんどいなかった(11名中2名)。「子どもへの共感・影響の配慮」に言及した人数の割合に両群で差があるかどうかをFisherの直接確率計算法によって検討したところ、 $p=.089$ (両側検定)で有意な傾向がみられた。この傾向は、子どもの月年齢が高くなると、断乳に際して子どもの心理的な側面がより考慮されるようになる可能性があることを示唆している。この理由については、2つの可能性が考えられるであろう。一つは、母親の側の個人的要因による説明である。すなわち、乳房や哺乳瓶を吸うことの子どものことについての心理的意味を重視していた人ほど、子どもの側が主体的に乳房や哺乳瓶からの使用をやめることを待つことになり、断乳する月年齢が高くなったのかもしれない。もう一つは、子どもの側の発達の要因による説明である。1歳6ヵ月という月年齢は、子どもに客体的な自己意識が成立する時期(DeHart et al., 2000)にあたり、子ども自身にとっても、母親の乳房や哺乳瓶を吸うことの意味が意識化されてくる時期にあたりと考えられる。したがって、この時期を過ぎると、断乳に対する子どもの抵抗が強くなったり、あるいは、言語的なスキルが備わってくることによって、断乳に対する拒否の意志や乳房を吸うことの必要性を、子ども自身が言語的に伝えたりすることがでてくる可能性がある。ゆえに、断乳の試みに対して子どもから抵抗を示されると、母親の側も、子どもの視点を考慮せざるを得なくなるのかもしれない。

### (3) 断乳時期の決定に際しての母親の葛藤

ここまでは、断乳時期の決定に関与した要因への言及の有無を、各カテゴリーごとに個別にみてきたが、次に、断乳に関する母親の内的経験をより複合的に捉えるため、断乳の決定・進行に際しての葛藤の有無という観点から、検討を加える。葛藤の有無については、表2の⑤、「断乳・哺乳継続の決定に関与した要因」のうち、同一個人の中で断乳を進める方向への考え(○印で記)と哺乳を続ける方向への考え(●印で記)の両方が挙げられていた場合に、葛藤があるものとみなした。表2の⑦に、個人別の葛藤の有無と、その葛藤がいずれの視点間の葛藤であるのかを示した。以下では、断乳の実行・完了時の、子どもの月年齢による母親の内的経験の違いについて、表2の③「断乳に対する(子どもからの)抵抗」や表2の⑥「断乳・哺乳継続の条件」も参照しながら、考察することにする。

表2からは、相対的に低い月年齢で断乳を完了した母子では、視点間の葛藤を経験しなかった母親が多い(11名中9名)ことが読みとれる。このうちの4名は、子どもに乳房を吸わせない代わりに、スキンシップの機会を増やすよう試みたり、乳房や代替物(タオルなど)への接触を積極的に認めたりしていた。一方、相対的に高い月年齢で断乳を完了した母子や、面接時点で断乳が未完了だった母子では、ほとんど(12名中10名)の母親が、同一視点内の葛藤、ないしは複数の視点間の葛藤を有していた。特に、2歳に近い時期になってから断乳が完了した母子や、断乳が未完了であった母子(Qさん母子～Wさん母子)では、全員の母親が、子どもの視点と他の視点(母親の個人的視点、健康管理者としての視点、あるいは社会的視点)との葛藤を経験していた。視点の葛藤がみられた人数の割合に両群で差があるかをFisherの直接確率計算法によって検討したところ、 $p=.003$ (両側検定)で有意であった。

以上の結果を、各カテゴリーへの言及の有無に関する結果と併せて総合的に解釈する。1歳代の後半になると、断乳や哺乳継続の決定の際に考慮される要因が変わってくるのと並行して、哺乳や断乳をめぐる母

親の内的経験が、より葛藤を含むものになることが推察された。すなわち、相対的に早い時期に断乳を完了した母子では、子どもの視点に言及した母親や、自身の授乳の希望を述べた母親はほとんどいなかった。また、断乳までに長期間を要した母子もいなかった。これらのことから解釈すると、相対的に低い月年齢であれば、母親の個人的視点や健康管理者としての視点に従って断乳を進めることが、比較的容易であるのかもしれない。あるいは、母親がもともと断乳に対して迷いを持っておらず、自身の負担や子どもの健康管理上の理由から、確固とした決意で断乳を試みた場合には、子どもからそれほど抵抗を受けずに、あるいは抵抗を受けたとしても、母親自身があまりそれを意に介することなくスムーズに断乳しうる、ということが言えるのかもしれない。

一方で、断乳完了時の子どもの月年齢が高かった母子や、哺乳を継続していた母子では、多くの母親が同一視点内の葛藤、あるいは視点間の葛藤を有していた。母親が抱えていた葛藤の内容は母子によって様々であったが、その中でも、「母親の個人的視点と健康管理者としての視点」「母親の個人的視点と子どもの視点」「社会的視点と子どもの視点」の間の葛藤を有していた人が相対的に多くいた。これには、(2)の結果で示されていたように子どもの月年齢が高くなると、断乳に関して、社会的視点や子どもの視点が意識化されやすくなることが関係しているものと考えられる。さらに、これらの母親がなぜ葛藤を抱えていたのかについては、次のような解釈が成り立つのではないかと考えられる。一つめは、乳房や哺乳瓶の子どもにとっての心理的意味をもともと重視していた母親ほど、断乳に対して消極的になり、子どもの視点と他の視点との間の葛藤を抱えることになったのではないかと、という可能性である。二つめは、子どもの月年齢が高くなると、(2)で述べたような子どもの発達上の理由から、母親の側も子どもの視点を意識化せざるを得なくなり、子どもの視点と他の視点間の葛藤を抱えることになったのではないかと、という可能性である。三つめは、母親自身に授乳の希望や授乳のニーズ（自身にとっての授乳の利便性）があると、断乳に対して消極的になり、個人的視点と他の視点との間に葛藤を抱えることになったのではないかと、という可能性である。

ところで、断乳に関して支援が必要とされる可能性が高いのは、断乳に困難を抱えていたり、断乳をめぐる心的な葛藤を抱えていたりする母子であると考えられる。そこで次に、断乳をめぐる葛藤を抱えていた人が多いことが分かった、断乳の完了時期が相対的に遅かった母子や断乳が未完了だった母子に焦点を当て、断乳の進行過程における母親の経験について、個々に詳しくみていくことにする。

#### (4) 断乳をめぐる母親の葛藤と、葛藤への対処

ここでは、相対的に遅い時期に断乳を行った母子、あるいは断乳が未完了であった母子の中でも、子どもの視点と他の視点との葛藤を経験していた Q さん、R さん、S さん、T さん、U さん、V さん、W さん母子の 7 組に焦点を当てる。これらの 7 名においては、視点の葛藤がどのように生じ、またどのようにして視点の葛藤への対処が図られたのであろうか。

まず、W さん母子を除く 6 組の母子には、以下の特徴がみられた。Q さん、S さん、T さん、U さん母子では、4 名の母親とも、はじめは自身の身体的負担や家族への影響を考えて、あるいは他者から断乳した方がいいという指導や助言を受けて、断乳を試みていた。つまり 4 名の母親は、自身の個人的視点や健康管理者としての視点に基づいて断乳を試みたものと考えられた。しかしながら、この 4 名は、断乳の試みに対して子どもから抵抗を受けたことで、哺乳や断乳が子どもにとって有する意味について、子どもの視点から見直す必要に迫られたのではないかと解釈できる。

**T さん**（面接者：1歳半の時にやめてみようかな、って思ったのは何かきっかけがあったんですか？）保健所の歯科健診で虫歯になりますよ、って言われて【健康管理者としての視点：歯の健康管理】。で、自分でも葛藤があって、この人の情緒的なことを考えると、やっぱり吸わせといてあげた方が情緒的には安定するだろうし【子どもの視点：子どもへの共感・影響の配慮】。でも、虫歯か、っていうのと【健康管理者としての視点：歯の健康管理】。どっちが大切になって考えて。でもとりあえず（断乳に）トライしてみよう、って。でもあまりにも泣くんで【断乳に対する子どもの抵抗】、自分も結局楽し【母親の視点：母親にと

つての利便性】、この人にもあんなに辛いことさせるの、まだいいかな、って【子どもの視点：子どもへの共感・影響の配慮】。そしたら、だんだん余計にとれなくなっちゃったんですけど。」

（【 】内は、直前の下線箇所に対してつけられた、カテゴリーの名称を意味する。）

さらに、Rさん、Sさん、Vさんの場合には、子どもへの共感や断乳による影響への配慮が、断乳に対する子どもの抵抗とは別の理由から生じており、それが哺乳を継続することにつながっていると思われた。すなわち、Rさんの場合には母乳が出なかったことを、Sさんの場合には仕事が多忙で子どもの相手を十分にできなかったことを、Vさんの場合には排泄訓練で自分が子どもを叱っていたことを補償する行為として、哺乳が意味づけられているようであった（下記プロトコル波線部）。

Rさん 私母乳が出なかったので、哺乳瓶をやめるのをすごい遅らせてたんですね。哺乳瓶は、1歳くらいからやめて下さい、って言われてたんですけど、可哀想かな、と思って【子どもの視点：子どもへの共感・影響の配慮】ずるずるしちゃってて。哺乳瓶のことも最後にはとても飲んでとは言えなかったです【社会的視点：身近な他者の意見・評価】。虫歯になっちゃうとか言われると、やめなくっちゃ【健康管理者としての視点：歯の健康管理】、っていうのもあったんですけど、なかなかできないんで、急には、おっぱいもなかなかでなかったしな、と思って。（じゃ、\*\*ちゃんのことを考えると？）なかなかやめられなかった。でも、みんなやめてますよね【社会的視点：身近な他者の意見・評価】。

Vさん （面接中に子どもにおっぱいを吸わせながら）「すいませんね、（ぐずった時の）常套手段で。内緒、内緒、みたいな【社会的視点：身近な他者の意見・評価】。

（母乳は）11ヵ月くらいで、一応やめてみました。別に意味はなくて、そろそろやめてみようか、なんか、虫歯のことがあったので。虫歯のことを一番心配して、11ヵ月【健康管理者と

しての視点：歯の健康管理】。それで、1回止まって、触るだけにして。

また復活したのは1歳半くらいだったかな。触るのはまた復活して、吸うのはさせなかったんだけど。おっぱいを吸われて）痛い、痛かったんですね。歯でぎりぎりやったりとか。これ痛いからやめよう、ってなって【母親の個人的視点：母親の身体的負担・制約】。2歳くらいになってまた吸い始めたんですよ。トイレをとるときに、自分が怒ってばかりだったので、可哀想になっちゃったのもあるんです。ちよつと風邪気味になっちゃって、熱もあるし、自分も怒っちゃってるし、その埋め合わせっていうか、そういうのもあって。いいのか悪いのかは後で考えよう、好きなようにさせてみよう、っていう【子どもの視点：子どもへの共感・影響の配慮】。

Rさん、Sさん、Tさん、Uさんの4名は同時に、断乳をしていないことに関して、「やめられないのは親の責任」「いけないと思う、甘やかしていると言われる」など、罪責感とも言える感情を述べていた。この感情は、自分たち母子の状態を社会的視点に照らし合わせてみた時に生じた感情だと考えられる。すなわち、この感情には、断乳しているのが望ましいとされる時期に哺乳を続けていることに対する後ろめたさや、「おっぱいをあげれば子どもが泣きやむから楽（Uさん）」、「私が子どもに根負けして（Tさん）」という言葉に示されたように、子どもの抵抗に屈して哺乳を続けていることに対する、自責の念が含まれているのではないかと考えられた。

最後に、Wさんについてであるが、今回対象となったのは、Wさんの第3子であった。Wさんは、自身が哺乳の継続を望んでおり、積極的な断乳を試みたことはなかったという点で、他の4名とは異なっていた。Wさんの場合、歯科医や身近な他者から断乳していないことについて指摘を受けていたが、自分たち母子にとっての哺乳の意味（プロトコル波線部）を重くみて、哺乳を続けるという選択をとっていた。この背景には、第1、2子の時にはあまり出なかった母乳が、第3子になって豊富に出た、というWさんに特有の事情が関係していたようであった。

Wさん 私の方でやめさせた方がいい、っていう思いがないので。お兄ちゃんたちの時は全然おっぱいが出なくて、なのに、3人めになったらもう出るわ出るわで。私自身もそれが嬉しくって。できるところまでおっぱいいいなあ、と思って【母親の個人的視点：母親自身の授乳の希望】。1歳でも全然断乳はやろうともしなくて、2歳の時も、やっぱり周りからは2歳だから、とは言われる【社会的視点：身近な他者の意見・評価】んだけど、いいのいいの、民族によってはね、3歳過ぎまで、4歳まで平気だし、それでどうってこともないし、って言って。保健所ではこたま怒られたんだけど、もうこんなに物心ついてたら、かえってとりあげの方が残酷な気がする【子どもの視点：子どもへの共感・影響の配慮】、って、まあ、私自身がやめる気がないから、って言ったら、虫歯になっても【健康管理者としての視点：歯の健康管理】それでも取り上げる残酷さを理めたいと思うんですか、とか言われて。でもやっぱりね、やめようって気はしなくて。で、私はなんかそれでやれるところまでやってみよう、って思ってた【母親の個人的視点：母親自身の授乳の希望】。うーん、3人めにしてほんとにちゃんと（母乳が）出たので、当時はこう、おっぱい適齢期の頃、子どもが小さい時は、やっとなんか一人前になれた、って私自身が嬉しかったな。でも最近やっぱりなんか、嬉しいだけではそんなにも続けなくて、なんとなくそうやって抱っこしたりとか、そういうスキンシップのチャンスみたいな感じかな。あと、ここまでできたらどのくらい続くのかな、とか、興味本位のところもあって。

では、面接時点で断乳が未完了であった5組の母子（Sさん、Tさん、Uさん、Vさん、Wさん母子）の母親は、どのようにして視点の葛藤に対処したのだろうか。5名のうち4名は、表2の⑥、哺乳継続の条件の、「断乳に対する子ども自身の理解」にあるように、子どもの側が断乳する必要があることを理解し始めたこと、あるいは子どもが近い将来断乳する必要があることを理解するようになるであろう、という期待を以て、断乳をめぐる視点の葛藤に折り合いをつけているように思われた。また、5名中4名は、哺乳の際に、「家ではいいが、外ではいけない」と子どもに制限を課したり、実際に哺乳の機会が減ってきたりしたこと、例えば、「毎日ではない」、「おっぱいを飲むのから、触るのだけになってきた」といった変

化が子どもに生じつつあることを以て、子どもが乳房を吸うことを容認しているものと思われた。

Uさん だんだん、飲むのから触るのだけになって【哺乳機会の制限・減少】、子どもから、だんだん。3歳になったらやめようね、って言うのと、隠したりとか。だんだん話す、言葉が分かってくれば、きっと自然に、自分も恥ずかしい、人前では恥ずかしい、ってなってくると思うので【断乳に対する子どもの理解】、それも勉強かな、って思っ

以上の結果から総合的に解釈すると、7名の母親は、自身の個人的視点、健康管理者としての視点、社会的視点、子どもの視点という、複数の視点の調整を図ることによって、断乳をめぐる葛藤に対処していったものと考えられた。すなわち、7名中6名の母親は、自身の個人的視点や健康管理者としての視点、社会的視点に鑑みて、断乳の必要があることを認識し、一度は断乳を試みていた。しかし、断乳の試みに対して子どもから抵抗を受けて、あるいは、母子に特有の事情があったことから、哺乳を望む子どもの視点をもち、考慮に入れていた。結果として、面接時点において哺乳を継続していた5名は、強制的に断乳を進めるのではなく、ゆるやかに断乳を進めるよう方向づけながら、徐々に子どもの側に断乳の必要があることが伝わりつつあることを以て、視点の葛藤に折り合いをつけたのではないかと考えられた。言い換えれば、断乳に関して母子の間で共通の理解が築かれつつあることを以て、視点の葛藤に折り合いがつけられたのではないかと推察された。これには、月齢が高くなるに伴い、子どもの側に理解力がついてくることや、断乳について言語的に説得しやすくなる、といった発達的変化が関係していたのではないかと推測される。

## 総合考察

### 断乳時期と、断乳をめぐる母親の内的経験

断乳をめぐる母親の経験について、本研究の結果からは以下の仮説が導かれた。

①1歳代には概して、授乳に伴う母親の身体的な負担・制約や、子どもの健康管理上の理由、すなわち、栄養の管理や哺乳による虫菌や菌列への影響を考慮して、断乳を進める方向に母親の意識が向くようになる。特に、1歳代前半は、栄養管理という観点から断乳が試みられることが多い時期であると考えられる。

②断乳時の子どもの月年齢が低い場合には概して、母親の意図に沿う形で断乳を進めやすく、ゆえに母親の心理的葛藤も少ないことが推測される。あるいは、もともと断乳の意図を強く持っている母親は、子どもの月年齢が相対的に低い時期に、確固とした決意で断乳に臨む可能性が高く、子どもからの抵抗をそれほど受けずに、あるいは子どもからの抵抗を受けてもそれをあまり意に介せず断乳しうることが推測される。

③1歳代も後半になると、断乳を完了した母子が増えたり、哺乳を続けていることについて他者から指摘を受けたりすることで、断乳を完了していない母親が社会的圧力を感じやすくなるものと考えられる。

④さらに、子どもの月年齢が高くなると、哺乳や断乳に対する子どもの視点が意識化されやすくなると考えられる。あるいは、もともと子どもの視点を重視している母親は、子どもの求めに応じて長く哺乳を続ける可能性がある。このため、子どもの月年齢が高くなると、断乳を進める方へと母親を方向づける視点（主に、自身の身体的負担・制約、健康管理者としての視点、社会的視点）と、哺乳を継続する方へと母親を方向づける視点（主に子どもの視点）との間で葛藤が生じる可能性が高くなり、母親は心理的葛藤を抱えやすくなるものと考えられる。

⑤母親は、自身の個人的視点、健康管理者の視点、社会的視点、子どもの視点という複数の視点の調整を図ることによって、断乳をめぐる葛藤に対処していくものと考えられる。また、断乳の過程は、2歳前後を境として変容することが推察され、2歳近い時期になると断乳は、母子相互の理解と同意に基づいて行われるようになるものと考えられる。

### 実践への示唆

本研究の結果からは、母子が断乳に至る背景には様々な要因があり、それによって断乳をめぐる母親の

葛藤が生じることが分かった。また、断乳をめぐる葛藤は、断乳を試みた時期や断乳の完了時期が遅かった場合に顕著であり、母親にとってそれは、複数の視点間の調整を迫られる経験となることが分かった。

哺乳を続けることは、母親に身体的な負担や制約を課すものであることを考えると、早い時期の断乳を薦めることはあながち間違いであるとは言えないかもしれない。また、子どもとの間に断乳についての共通理解が築かれるのを待って断乳することは、母親にとっては時間も労力も要することであると考えられる。しかし、早い時期に楽に断乳できることが、必ずしもその母子にとっていいことであるとは限らないように思われる。例えば、本研究の協力者の中で相対的に遅い時期に断乳を試みた母子や、哺乳を続けていた母子の中には、背景にその母子に特有の事情があり、哺乳を続けることが母、子双方にとって特別な心理的意味を持っていたと思われるケースもあった。母子の関係性の発達という観点からみれば、哺乳を続けることや、断乳の葛藤を乗り越えること自体が、その母子にとって重要な意味を持つ場合もあるのかもしれない。こうした母子の存在は、まずは個々の母子が抱えている背景を理解し、哺乳がその母子にとってどのような心理的意味を有する行為であるのかを考える必要があることを我々に教えてくれている。無論、哺乳が長引くことによる弊害を認識しておくことは重要である。しかし、断乳をめぐる様々な葛藤を抱えた母子を支援する際に、心理の専門家に求められるのは、早い時期の断乳を促すことでも、哺乳の継続を促すことでもなく、哺乳や断乳をめぐる生じた視点間の葛藤を統合する手助けをし、できれば母子の双方が納得しうる形で断乳することができるよう、援助することであると言えるのではないだろうか。

### 注

1 ここでは断乳と卒乳の区別、すなわち、乳房や哺乳瓶乳首からの哺乳の停止を母親主導で行ったのか、それとも子ども主導で行ったのかについては問わない。これは、いずれの主導で乳房や哺乳瓶乳首からの哺乳の停止が行われたのかを区別する明確な基準がなく、厳密に両者を分けることは難しいと考えられるからである。

2 本論文では、子どもが母親の乳房を吸うことを指すのに、原則的には哺乳という語を用いている。しかし、哺乳が、子どもに乳を与える、という母親の側の行為として強く意味づけられていると思われる場合には、例外的に授乳という語を用いることとした。

3 Vさんの1回目の断乳の試みは、生後11ヵ月齢に行われており、その際に一度、断乳が完了している。ゆえに、本来はVさん(の1回目の断乳のデータ)を、相対的に低い月年齢で断乳した母子の群の中にも含めるのが妥当であると考えられる。しかし、統計的検定を行うにあたっては、サンプルの独立性の問題から、同一の個人を両群に含めることはできない。そこで、統計的検定を行うにあたっては、面接時点での状況に関するデータを優先的に扱うこととした。Oさん、Sさんについても同様に、より面接時点に近い時点での状況に関するデータを優先させることとした。

## 謝辞

日々のお忙しい育児の中、快く面接に応じて下さいました協力者の皆さまに、心より御礼申し上げます。

## 引用文献

- Creswell, J.W. (1994). *Research design: Qualitative and quantitative approaches*. Thousand Oaks, CA: Sage.
- DeHart, Sroufe, L.A., & Cooper, R.G. (2000). *Child Development. Its nature and course*. Forth edition. Graw Hill.
- 二木 武. (1984). 断乳. 周産期医学, 14, 558-559.
- 平山宗宏. (1992). 母乳のやめ方. 周産期医学, 22 (増刊号), 318-320.
- 今村栄一. (1987). わが国の断乳の歴史的経過. 小児科診療, 49, 1408-1412.
- 石川房子・吉橋和子・福田良子・伊藤憲美・伊藤順子・成清マサキ・西谷徳美・加藤則子. (2002). 母乳栄養児のう蝕罹患の実態についての考察——ほんとに、虫歯は母乳のせい? ペリネイタル・ケア, 21, 173-177.
- Glaser, B. & Strauss, A. (1967). *The discovery of grounded theory*. Chicago: Aldine Publishing Co.
- 厚生省児童家庭局母子保健課長. (1996). 改訂「断乳の基本」について. 小児保健研究, 55, 127-129.
- 厚生労働省母子保健課. (2000). 「母子健康手帳改正に関する検討会」の報告について.
- McDade, T. & Worthman, C.M. (1998). The weanling's dilemma reconsidered: A biocultural analysis of breastfeeding ecology. *Journal of Developmental & Behavioral Pediatrics*, 19, 286-299.
- 毛利子来・山田 真(編)(1997). おっぱいでないとダメ母ですか? ちいさい・おおきい・よわい・つよい, 14. 静岡: ジャパンマシニスト社.
- 中尾優子・宮原晴美. (2001). 断乳(卒乳・断乳)時期の育児不安状況. 長崎大学医療技術短期大学紀要, 14, 65-68
- 南部春生・太田八千雄・服部哲夫・三浦正次. (1996). 断乳と断乳「自然卒乳の提唱」 周産期医学, 26, 525-530.
- 南部春生. (1989). 心理面からみた母乳栄養. 小児医学, 22, 918-936.
- 根ヶ山光一. (1997). 断乳と母子関係: 桶谷式断乳とラ・レーチェ・リーグ式卒乳の比較. 行動科学研究, 36, 1-11.
- 桶谷そとみ. (2002). 母乳のすすめ. (増補第3版) 東京: 鳳鳴堂書店.
- 大竹邦明. (1984). 断乳: 歯科学的立場より. 周産期医学, 14, 553-557.
- Strauss, A. & Corbin, J. (1998). *Basics of qualitative research: Techniques and procedures for developing grounded theory*. Thousand Oaks, CA, US: Sage.
- 田村康夫・山田 賢. (1998). 母乳と虫歯, 咀嚼機能の発達との関係. 助産婦雑誌, 52, 26-31.
- 田中泰恵・林俊郎. (2002). わが国における母乳哺育に関するガイドラインの混乱について. 目白大学人間社会学部紀要, 2, 349-363.

(2002.6.30 受稿, 2002.11.22 受理)